

A dark, textured map of East Asia, including China, Korea, and Japan, serves as the background. The map is rendered in shades of brown, green, and blue, with a slightly grainy, historical feel.

中国の文化Ⅲ

日中文化交流史

第四回 遣唐使の時代

前回の復習

——東アジア大統一の時代

〔解説〕

六世紀の末から七世紀にかけて、東アジアは大統一の時代を迎える。

大陸では、三百年近く続いた南北分裂の時代に終止符が打たれ、中国全土を統一した巨大帝国が誕生した。隋である。

0	後漢 25-220		
100			
200	魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
300	晉 265-316		
400	五胡十六国時代	東晉 317-420	
500	北朝 439-589	南朝 420-589	
600	隋 581-619		
700			
800	唐 618-907		
900			
1000	五代十国 907-960		
1100	遼	北宋 960-1127	
1200	金 1115-1234	南宋 1127-1279	
1300	元 1271-1368		
1400			
1500	明 1368-1644		
1600			
1700			
1800	清 1616-1912		
1900			
2000	中華民國 1912-1949		
	中華人民共和國 1949-		



前回の復習

東アジア大統一の時代

〔解説〕

隋は東アジアに新たな国際秩序を築くため、高句麗への遠征を始める。

東アジアの国際情勢に緊張が高まる中、倭は第一回遣隋使を派遣する。

しかし、隋からその後進性を指摘された倭は、朝鮮半島からの渡来僧をブレインとして、冠位十二階や憲法十七条などの制度改革を行う。

制度改革によって「近代化」を実現した倭は、第二回遣隋使を派遣し、自主独立の平和外交を通じて、隋との間に対等な国家関係を樹立した。

〔解説〕

一方、隋は高句麗遠征の失敗や大運河の建設によって人々の支持を失い、建国からわずか三十年ほどで滅亡してしまった。

隋に代わって唐が建国すると、倭は引き続き使節を送り、自主独立の平和外交を続けるとともに、大陸の先進的な文化の導入に努めた。

後漢 25-220

魏 220-265

蜀 221-263

吳 222-280

晉 265-316

五胡十六国時代

東晉 317-420

北朝 439-589

南朝 420-589

隋 581-619

唐 618-907

五代十国 907-960

遼

北宋 960-1127

金 1115-1234

南宋 1127-1279

元 1271-1368

明 1368-1644

清 1616-1912

中華民國 1912-1949

中華人民共和國 1949-



〔解説〕

唐は東アジアに新たな国際秩序を築くため、朝鮮半島への影響力を拡大していった。

倭は、百済との同盟を主張する蘇我氏を肅正し（乙巳の変・大化の改革）、唐や朝鮮半島諸国との等距離外交に努めた。

しかし、唐が朝鮮半島の新羅と手を結んで百済を滅すと、危機感を抱いた倭は、それまでの自主独立の平和外交を捨て、六六三年、朝鮮半島に出兵した。日本古代史上最大の海外派兵となった白村江の戦いである。

後漢 25-220		
魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
晉 265-316		
五胡十六國時代	東晉 317-420	
北朝 439-589	南朝 420-589	
隋 581-619		

魏 220-265	蜀 221-263	吳 222-280
晉 265-316		

晋 265-316

五胡十六国時代	東晋 317-420

五胡十六国時代	東晋 317-420

北朝 439-589	南朝 420-589
北魏 439-534 北齐 534-581 北周 534-581	宋 420-479 齐 479-502 梁 502-557 陈 557-589

北朝 439-589	南朝 420-589
北魏 439-534 北齐 534-581 北周 534-581	宋 420-479 齐 479-502 梁 502-557 陈 557-589

隋 581-619

唐 618-907

五代十国 907-960

遼	北宋 960-1127
---	-------------

遼	北宋 960-1127
---	-------------

金 1115-1234	南宋 1127-1279
-------------	--------------

金 1115-1234	南宋 1127-1279
-------------	--------------

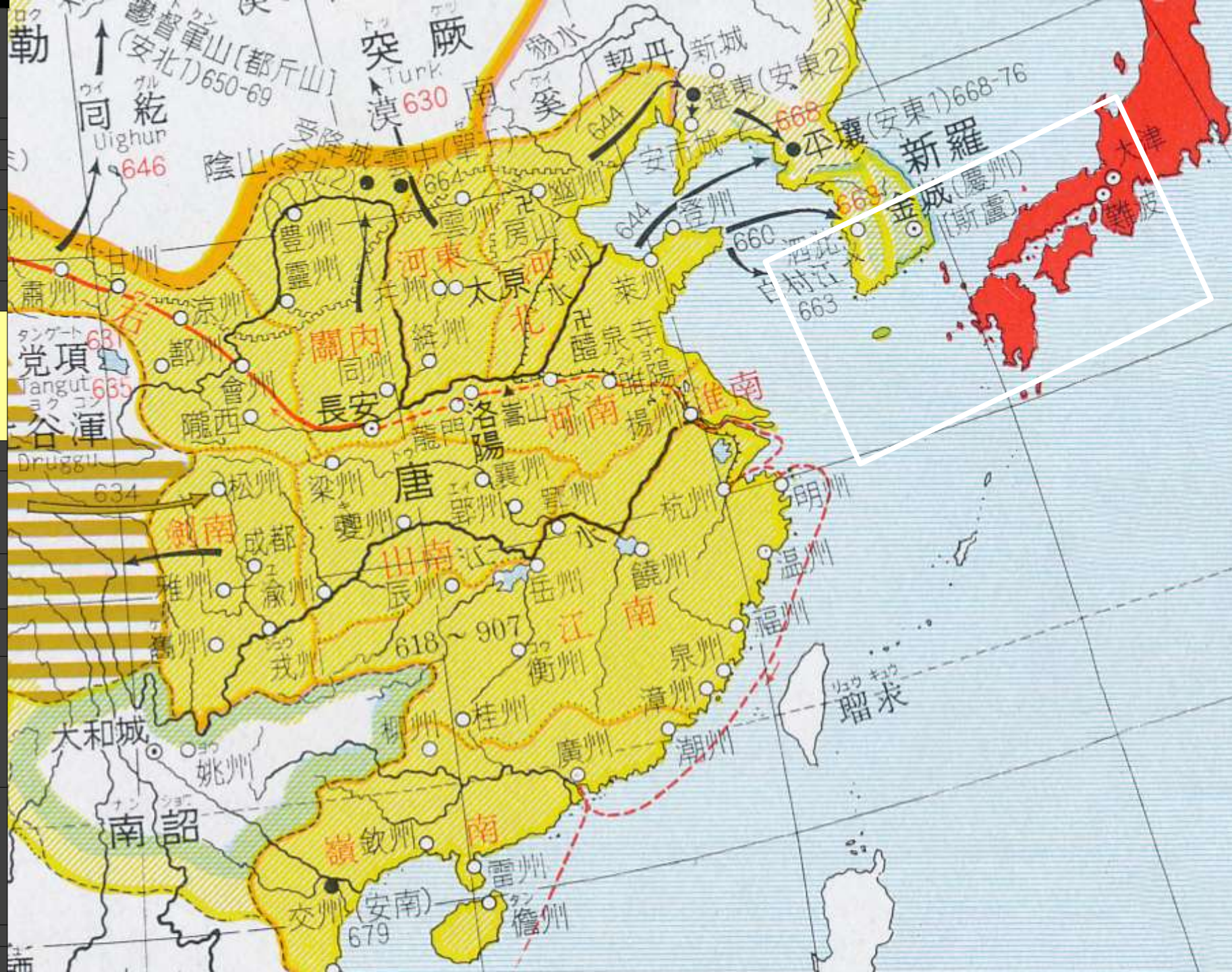
元 1271-1368

明 1368-1644

清 1616-1912

中華民國 1912-1949

中華人民共和國 1949-



唐の水軍

白村江の戦い 新羅の軍
663年

倭の水軍



東アジア大統一の時代

〔解説〕

白村江の戦いで、倭は唐・新羅連合軍に大敗を喫する。

その五年後、高句麗も唐に滅ぼされ、朝鮮半島は新羅によって統一された。

高麗神社

日本に渡来した高句麗の遺民たち

〔解説〕

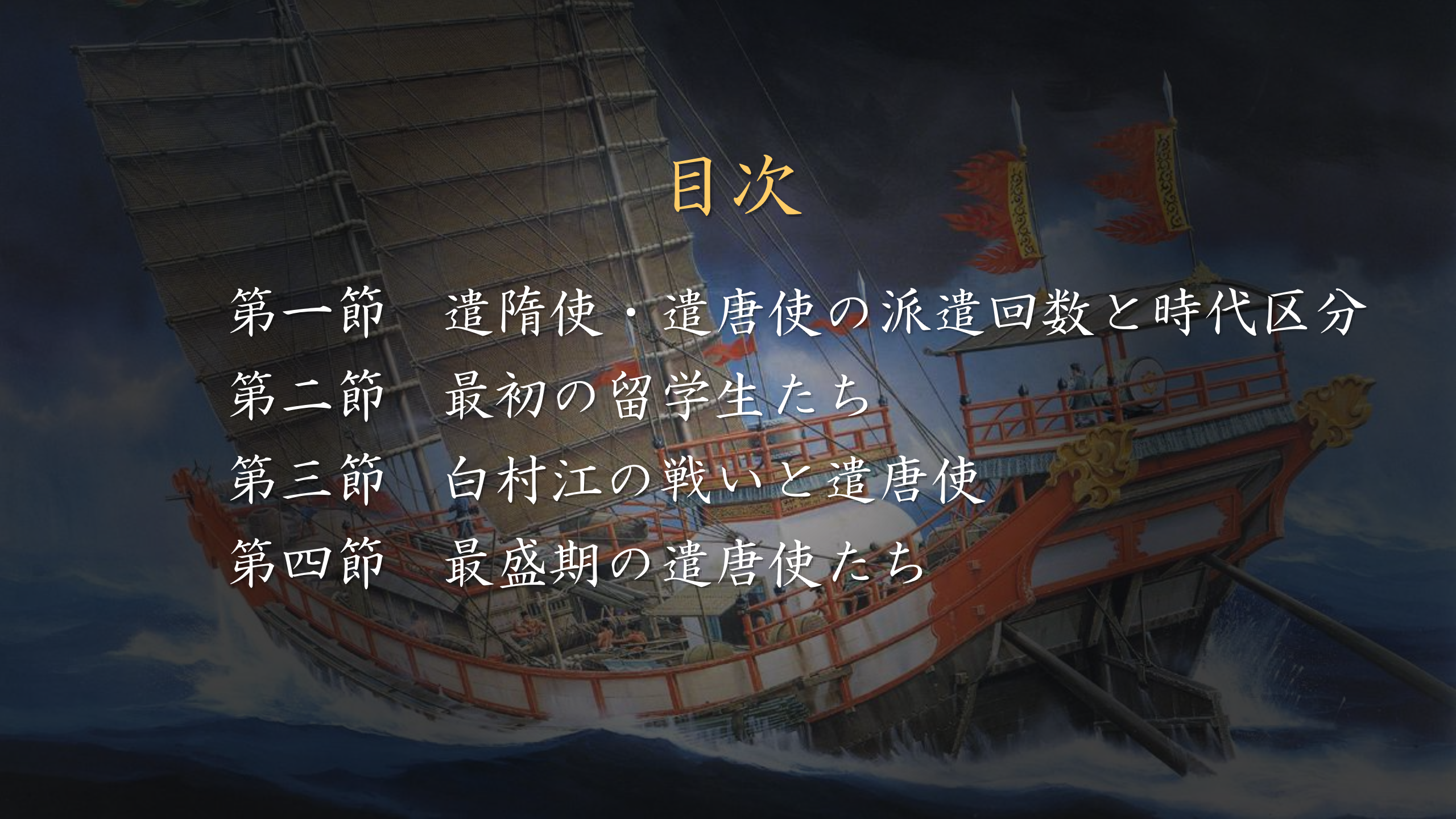
百済や高句麗が滅亡した後、その遺民の一部は日本列島に渡来した。朝廷は帰化した人々に土地を与えた。たとえば七一六年、朝廷は現在の埼玉県日高市・飯能市一帯に一七九九人の高句麗人を移住させ、高麗郡を設置した。日高市にある高麗神社には、高句麗の王族とされる高麗王（このまのこにしき）若光が祭られている。



東アジア大統一の時代

〔解説〕

白村江の戦いに敗れた倭は、唐との外交関係が三十年以上も中断する中、唐の制度にならってさらなる改革を進め、国号も「日本」と改めて、再び唐との平和外交を開始する。



目次

- 第一節 遣隋使・遣唐使の派遣回数と時代区分
- 第二節 最初の留学生たち
- 第三節 白村江の戦いと遣唐使
- 第四節 最盛期の遣唐使たち

第一節 遣隋使・遣唐使の派遣回数と時代区分



遣隋使、遣唐使はそれぞれ何回派
遣されたのか？

① 遣隋使三回、遣唐使十回

② 遣隋使四回、遣唐使十五回

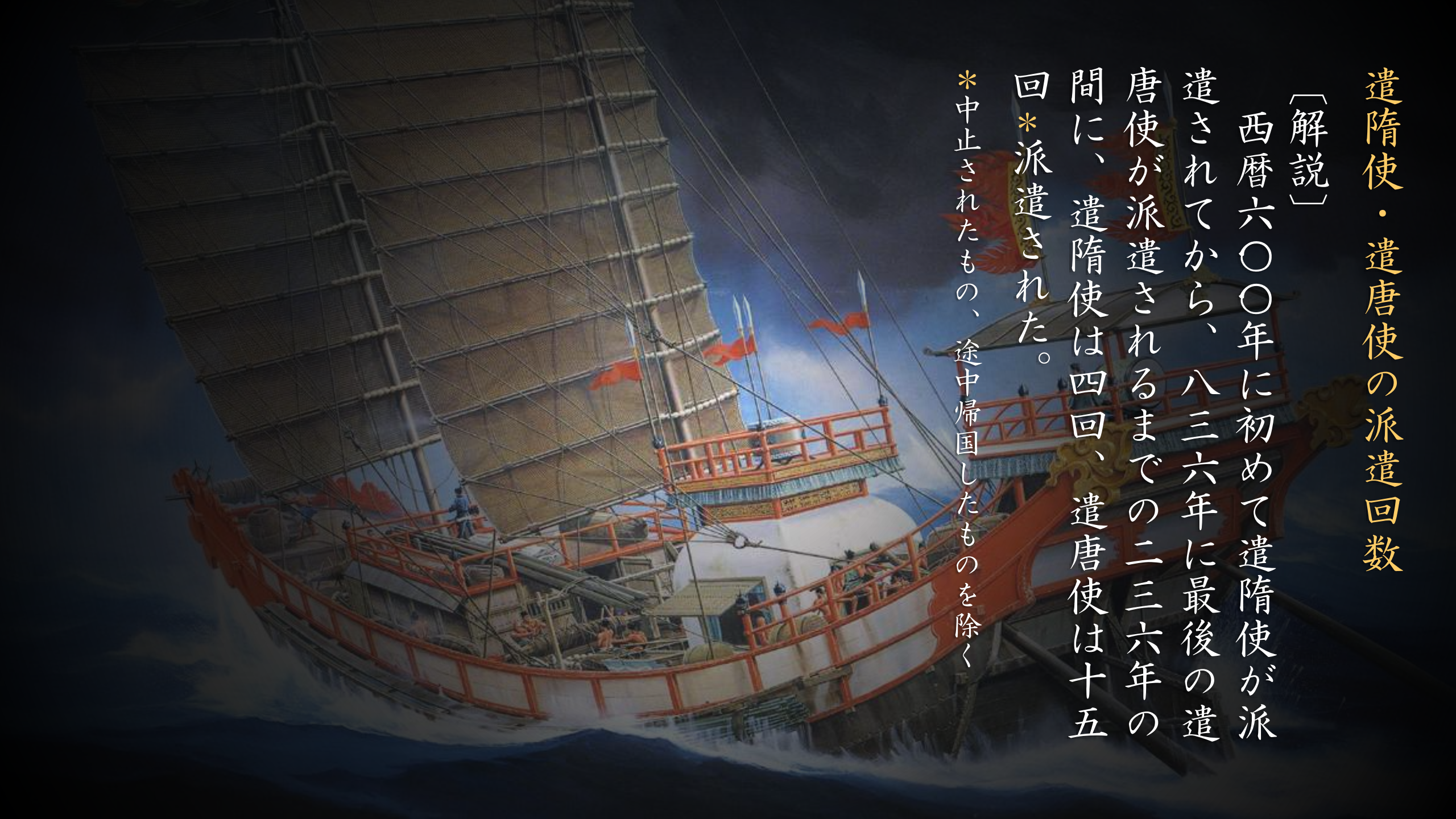


遣隋使・遣唐使の派遣回数

〔解説〕

西暦六〇〇年に初めて遣隋使が派遣されてから、八三六年に最後の遣唐使が派遣されるまでの二三六年の間に、遣隋使は四回、遣唐使は十五回*派遣された。

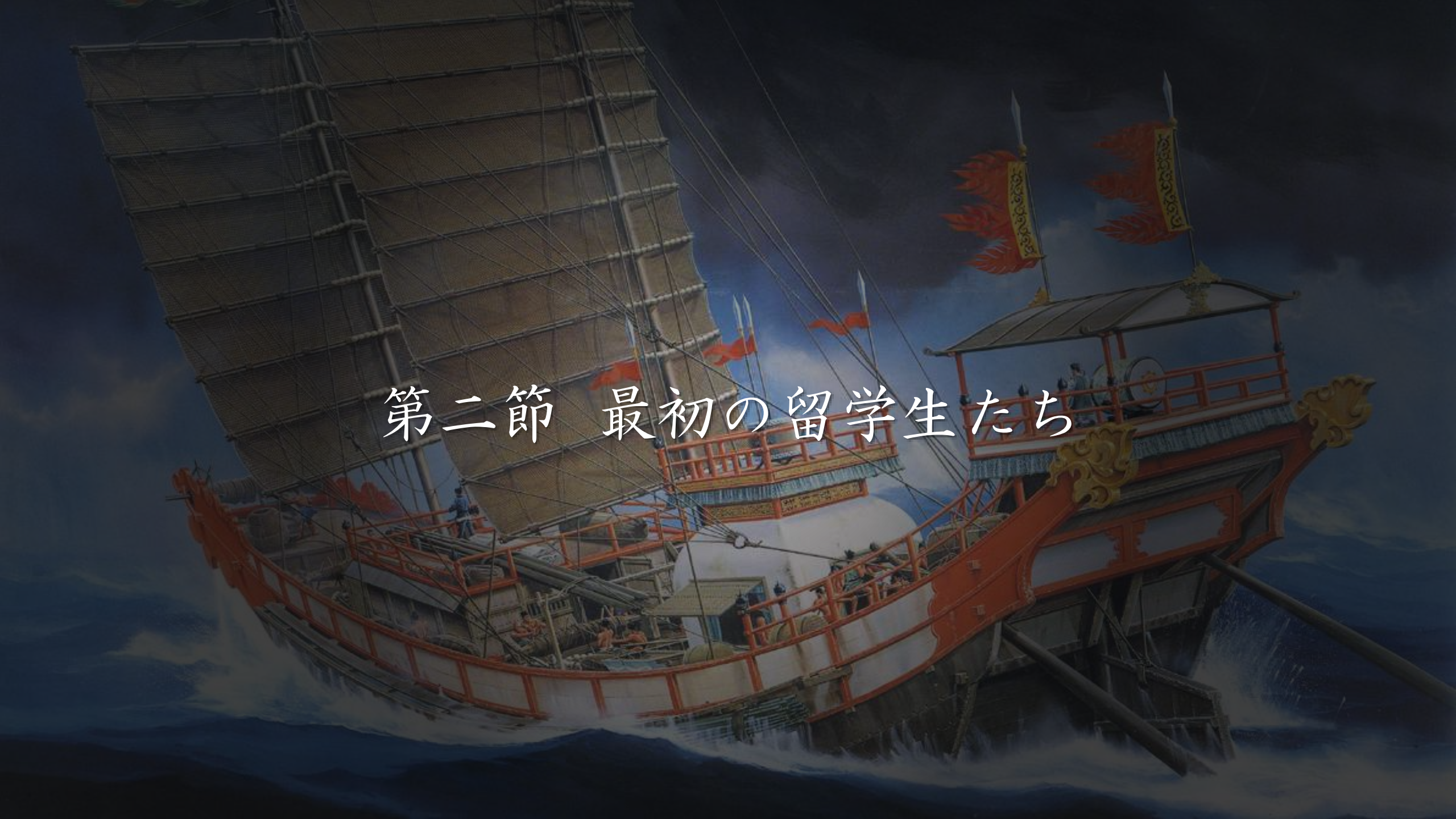
*中止されたもの、途中帰国したものを除く



西暦	中国	日本	遣使	備考
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	日本書紀に記録なし
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使	小野妹子を派遣
608年	4年	16年	第三回遣隋使	送使 留学生の派遣を開始
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観 4年	舒明2年	第一回遣唐使	
653年	唐高宗永徽 4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶 4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳 2年	天智4年	第五回遣唐使	
667年	乾封 2年	6年	途中帰国	送使(百済まで)
669年	総章 2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安 2年	大宝2年	第七回遣唐使	
717年	唐玄宗開元 5年	養老元年	第八回遣唐使	阿倍仲麻呂、井真成らが唐に留学
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝 5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	唐から鑑真上人を招来
759年	唐肅宗乾元 2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	菅原道真の建議により中止
907年	唐が滅亡			

西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観 4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽 4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶 4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳 2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封 2年	6年	途中帰国	
669年	総章 2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安 2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元 5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝 5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元 2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			

第二節 最初の留学生たち



西暦	中国	日本	遣使
600年	隋文帝開皇20年	推古 8年	第一回遣隋使
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使
608年	4年	16年	第三回遣隋使(最初の留学生を派遣)
614年	10年	22年	第四回遣隋使
618年	隋が滅亡し、唐が建国		
623年	唐高祖武徳 6年	31年	第一期留学生の倭漢直福因が帰国
630年	唐太宗貞観 4年	舒明 2年	第一回遣唐使
640年	14年	12年	第一期留学生の南淵漢人請安、高向漢人玄理が帰国
644年	18年	皇極 3年	中大兄皇子と中臣鎌足、南淵漢人請安から儒教を学ぶ
645年	19年	大化元年	大化の改新によって誕生した中大兄皇子らの新政権は、第一期留学生の新漢人日文（僧旻）と高向漢人玄理を国博士に迎え、唐の制度に倣って新たな国づくりを始める

第三次遣隋使（『日本書紀』では第二次）

「（推古天皇の十六年）九月……辛巳、唐の使節裴世清が帰国することになり、小野妹子を大使とし、吉士雄成を小使とし、（鞍作）福利を通訳として、唐の使節とともに派遣した。」

『日本書紀』卷二二推古天皇十六年

置於大門前机^上而奏之事畢而退焉是時皇子諸王諸臣悉以金髻華著頭亦衣服皆用錦紫繡織及五色綾羅^{一云服色皆用冠色}丙辰饗唐客等於朝九月辛未朔乙亥饗客等於難波大郡宰已唐客裴世清罷歸則復以小野妹子臣爲大使吉士雄成爲小使福利爲通事副于唐客而遣之爰天皇聘唐帝其辭曰東天皇敬白西皇帝使人鴻臚寺掌客裴世清等至久憶方解季秋薄冷尊何如想清念此即如常今遣大禮蘇因高^{大禮乎那利}等往謹白不具是時遣於唐國學生倭漢直福因奈羅譯語惠明高向漢人玄理新漢人永國學問僧新漢人日文南淵漢人請安志賀漢人惠隱漢人廣濟等并八人也

隋に派遣された最初の留学生たち

「この時、唐国に遣わされし学生は、倭漢直福因（やまとのあやのあた いふくいん）奈羅訳語恵明（ならのおさえみよう）

高向漢人玄理（たかむくのあやひとくろまる）

新漢人大国（いまきのあやひとおおくに）

学問僧は、

新漢人日文（いまきのあやひとにちもん）

南淵漢人請安（みなみぶちのあやひとしょうあん）

志賀漢人恵隱（しがのあやひとえいん）

漢人広濟（あやひとこうさい）

など并せて八人なり。

紫繡織及五色（日本書紀卷二）推古天皇十六年
於朝九月辛未朔乙亥饗客等於難波大郡宰
已唐客裴世清罷歸則復以小野妹子臣爲大

日本書紀卷二

十四

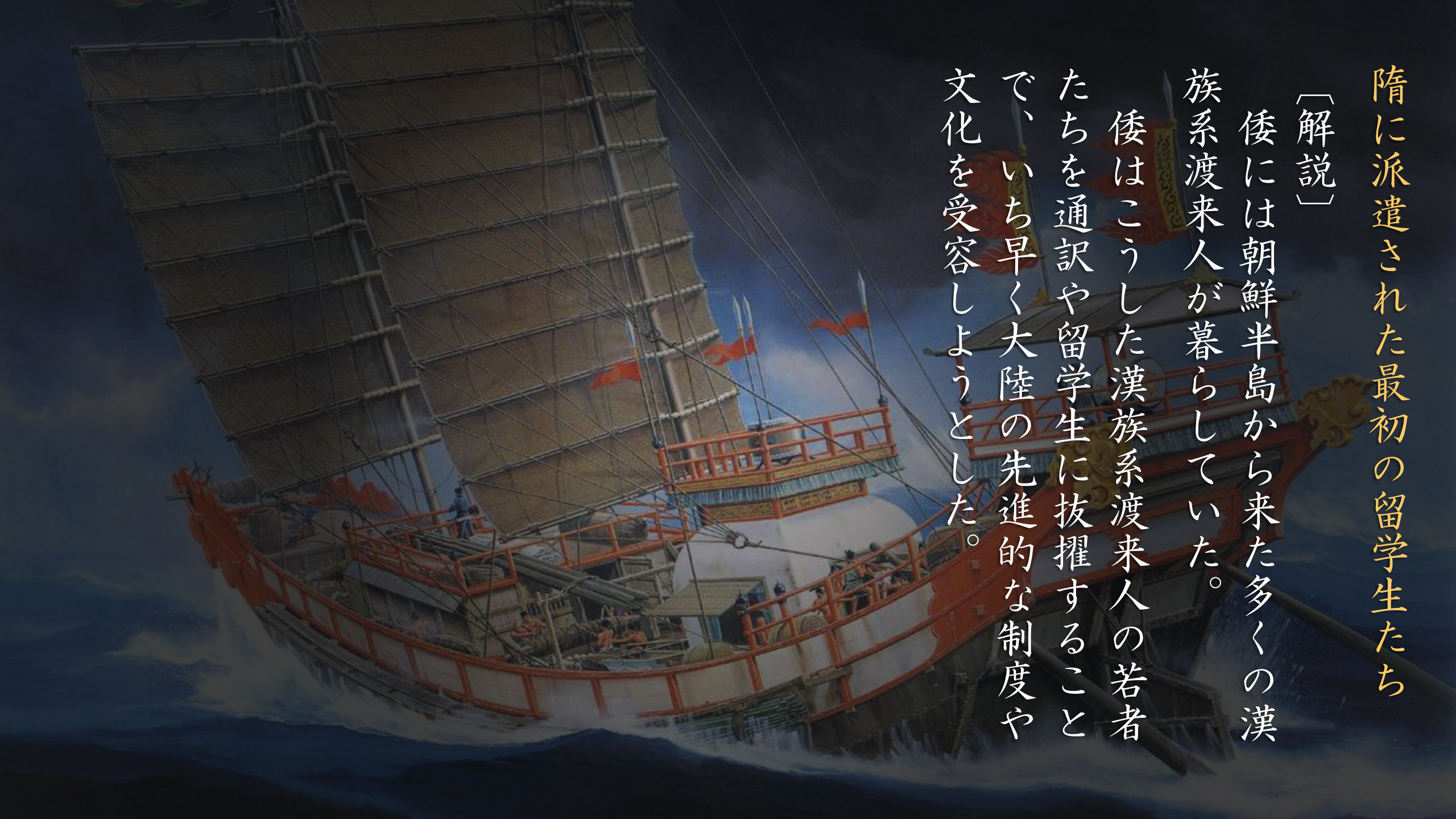
使吉士雄成爲小使福利爲通事副于唐客而
遣之爰天皇聘唐帝其辭曰東天皇敬白西皇
帝使人鴻臚寺掌客裴世清等至久憶方解季
秋薄冷尊何如想清念此即如常今遣大禮蘓
因高大禮乎那利等往謹白不具是時遣於唐
國學生倭漢直福因奈羅譯語恵明高向漢人
玄理新漢人大唐學問僧新漢人日文南淵漢
人請安志賀漢人恵隱漢人廣濟等并八人也

隋に派遣された最初の留学生たち

〔解説〕

倭には朝鮮半島から来た多くの漢族系渡来人が暮らしていた。

倭はこうした漢族系渡来人の若者たちを通訳や留学生に抜擢することです、いち早く大陸の先進的な制度や文化を受容しようとした。



第三次遣隋使とともに隋に渡った漢族系渡来人の子弟を中心とする最初の留学生たちは、隋が滅亡して唐が建国した後、どうなったか？

①唐の先進的な文化に憧れ、そのま
ま唐に定住して帰って来なかった

②倭に帰国して唐の先進的な制度を
紹介し、交流の継続を進言した



西暦	中国	日本	遣使
600年	隋文帝開皇20年	推古 8年	第一回遣隋使
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使
608年	4年	16年	第三回遣隋使(第一期留学生を派遣)
614年	10年	22年	第四回遣隋使
618年	隋が滅亡し、唐が建国		
623年	唐高祖武徳 6年	31年	第一期留学生の倭漢直福因らが新羅大使とともに帰国
630年	唐太宗貞観 4年	舒明 2年	第一回遣唐使
640年	14年	12年	第一期留学生の南淵漢人請安、高向漢人玄理が帰国
644年	18年	皇極 3年	中大兄皇子と中臣鎌足、南淵漢人請安から儒教を学ぶ
645年	19年	大化元年	大化の改新によって誕生した中大兄皇子らの新政権は、第一期留学生の新漢人日文（僧旻）と高向漢人玄理を国博士に迎え、唐の制度に倣って新たな国づくりを始める

像居於葛野秦寺以餘舍利金塔觀頂幡等皆
納于四天王寺是時大唐學問者僧惠濟惠光
及醫惠日福因等並從智洗爾等來之於是惠
日等共奏聞曰留于唐國學者皆學以成業應
嘆且其大唐國者法式備定珍國也常須達是
歲新羅伐任那任那附新羅於是天皇將討新
羅謀及大臣詢于羣卿田中臣對曰不可急討
先察狀以知逆後擊之不晚也請試遣使觀其

消息中臣連國曰任那是元我內官家今新羅
人伐而有之請戒戎旅征伐新羅以取任那附
百濟寧非益有于新羅乎田中臣曰不然百濟

帰国した留学生たち

（六二三年、新羅と任那の使節が
来朝し）唐に留学していた学問僧・
惠濟、惠光、医師・惠日、倭漢直福
因らが（新羅大使）智洗爾らとともに
帰朝した。

惠日らはともに上奏していった。
「唐に留学した学生たちは、学業も
修まったので帰国させるべきでしよ
う。また唐は法制度の整った優れた
国なので交流を続けるべきです。」

隋に派遣された最初の留学生たち

「この時(六〇八年)、唐国に遣わされし学生は、

倭漢直福因(やまとのあやのあた いふくいん)

奈羅訳語恵明(ならのおさえみよう)

高向漢人玄理(たかむくのあやひとくろまる)

新漢人大国(いまきのあやひとおおくに)

学問僧は、

新漢人日文(いまきのあやひとにちもん)

南淵漢人請安(みなみぶちのあやひとしょうあん)

志賀漢人恵隱(しがのあやひとえいん)

漢人広濟(あやひとこうさい)

など并せて八人なり。

於朝九月辛未朔日本書紀卷三十三推古天皇十六年
唐客裴世清罷歸則復以小野妹子臣爲大

使吉士雄成爲小使福利爲通事副于唐客而
遣之爰天皇聘唐帝其辭曰東天皇敬白西皇
帝使人鴻臚寺掌客裴世清等至久憶方解季
秋薄冷尊何如想清念此即如常今遣大禮蘓
因高太禮乎那利等往謹白不具是時遣於唐
國學生倭漢直福因奈羅譯語恵明高向漢人
玄理新漢人大國學問僧新漢人日文南淵漢
人請安志賀漢人恵隱漢人廣濟等并八人也

西暦	中国	日本	遣使
600年	隋文帝開皇20年	推古 8年	第一回遣隋使
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使
608年	4年	16年	第三回遣隋使(最初の留学生を派遣)
614年	10年	22年	第四回遣隋使
618年	隋が滅亡し、唐が建国		
623年	唐高祖武徳 6年	31年	第一期留学生の倭漢直福因が新羅大使とともに帰国
630年	唐太宗貞観 4年	舒明 2年	第一回遣唐使
640年	14年	12年	第一期留学生の南淵漢人請安、高向漢人玄理が帰国
644年	18年	皇極 3年	中大兄皇子と中臣鎌足、南淵漢人請安から儒教を学ぶ
645年	19年	大化元年	大化の改新によって誕生した中大兄皇子らの新政権は、第一期留学生の新漢人日文（僧旻）と高向漢人玄理を国博士に迎え、唐の制度に倣って新たな国づくりを始める

西暦	中国	日本	遣使
600年	隋文帝開皇20年	推古 8年	第一回遣隋使
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使
608年	4年	16年	第三回遣隋使(最初の留学生を派遣)
614年	10年	22年	第四回遣隋使
618年	隋が滅亡し、唐が建国		
623年	唐高祖武徳 6年	31年	第一期留学生の倭漢直福因が新羅大使とともに帰国
630年	唐太宗貞観 4年	舒明 2年	第一回遣唐使
640年	14年	12年	第一期留学生の南淵漢人請安、高向漢人玄理が帰国
644年	18年	皇極 3年	中大兄皇子と中臣鎌足、南淵漢人請安から儒教を学ぶ
645年	19年	大化元年	大化の改新によって誕生した中大兄皇子らの新政権は、第一期留学生の新漢人日文（僧旻）と高向漢人玄理を国博士に迎え、唐の制度に倣って新たな国づくりを始める

大陸の文化を伝えた留学生

舒明天皇十二年（六四〇年）冬十月、唐へ留学していた学問僧・清安（南淵漢人請安）と学生・高向漢人玄理が新羅を通り、百濟、新羅の朝貢使節とともに帰国した。

日本書紀卷二三舒明天皇十二年

已朔壬午華子伊豫溫湯宮是月於百濟川側
建九重塔
十二年春二月戊辰朔甲戌星入月婁四月丁
卯朔壬午天皇至自伊豫便居廐坂宮五月丁
酉朔辛丑大設齋因以請惠隱僧令說无量壽

經冬十月乙丑朔乙亥大唐學問僧清安學生
高向漢人玄理傳新羅而至之仍百濟新羅朝
貢之使共從來之則各賜爵一級是月徙於百
濟宮

十三年冬十月己丑朔丁酉天皇崩于百濟宮
丙午殯於宮北是謂百濟大殯是時東宮開別
皇子年十六而誅之

日本書紀卷第二十三

隋に派遣された最初の留学生たち

「この時、唐国に遣わされし学生は、倭漢直福因（やまとのあやのあた いふくいん）奈羅訳語恵明（ならのおさえみよう）

高向漢人玄理（たかむくのあやひとくろまる）

新漢人大国（いまきのあやひとおおくに）

学問僧は、

新漢人日文（いまきのあやひとにちもん）

南淵漢人請安（みなみぶちのあやひとしょうあん）

志賀漢人恵隠（しがのあやひとえいん）

漢人広濟（あやひとこうさい）

など并せて八人なり。

紫繡織及五色（日本書紀卷二）推古天皇十六年於朝九月辛未朔乙亥饗客等於難波大郡宰已唐客裴世清罷歸則復以小野妹子臣爲大

日本書紀卷二

十四

使吉士雄成爲小使福利爲通事副于唐客而遣之爰天皇聘唐帝其辭曰東天皇敬白西皇帝使人鴻臚寺掌客裴世清等至久憶方解季秋薄冷尊何如想清念此即如常今遣大禮藕因高太禮乎那利等往謹白不具是時遣於唐國學生倭漢直福因奈羅譯語恵明高向漢人玄理新漢人太國學問僧新漢人日文南淵漢人請安志賀漢人恵隠漢人廣濟等并八人也

留学生が、大陸や朝鮮半島の新たな情勢を伝えると、日本国内では外交方針をめぐって大政変が起った。その大政変とは何か？

①乙巳の変(大化の改新)

②壬申の乱





NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年 第4回 そして日本が生まれた」

中大兄并中臣連見古麻呂等恐入鹿威流行不進咄嗟即率彼等俱拔釵傷
 割入鹿肩入鹿驚起古麻呂運手揮釵斬其一脚入鹿轉就御座叩頭奏云臣不
 知罪乞垂審察天皇大驚詔云何事如此耶中大兄伏地奏云敕作畫賊天宗將領
 皇位豈以天孫代轉作乎意指敦山背大兄王等也天皇起入大殿手開殿戶遂以古麻
 呂等令誅入鹿一說云中臣連以大刀打落入鹿肩次中大兄以釵打落其首入鹿高衝
 座戶云一說云入鹿首飛昨付御薦云一說云首飛雷石柱躍揚四十遍一說云入鹿起
 中大兄與錦一連目合共立遂斬入鹿流血教外彼斬卧之冠怒目動身鏹一連斬
 入鹿首其首躍騰教度矣于時中臣連年卅一斯時宮中震動皆歌萬歲

豐浦大臣振夷凶賊未平中大
 兄即入法興寺攝城二卿大夫悉
 皆隨焉于時使人賜入鹿屍於
 大臣恨夷於是賊黨皆云吾
 君太即已被誅戮大臣急立候
 其誅決矣然則為誰寧戰直
 被刑乎言畢解釵投弓賊悉散

是日雨降潑水
 庭以席障子掩入
 鹿屍時人以爲
 天誅逆

多武峰(とうのみね)縁起絵卷 (奈良県櫻井市談山神社蔵)

皇極天皇

中臣鎌足

蘇我入鹿

中大兄皇子

多武峰(とうのみね)縁起絵巻 (奈良県櫻井市談山神社蔵)

付御簾云一説云首飛嚙石柱躍揚
立遂斬入鹿流血教并彼斬卧之尅怒目
矣于時中臣連年卅一斯時宮中震動



中大兄皇子と中臣鎌足は、どのような人物から大陸や朝鮮半島の国際情勢や文化を学んだのか？

① 高句麗や百済から来た僧侶

② 帰国した留学生



跪恭奉中大兄對跪敬執自茲相善俱迷
所懷既無可遁復恐他嫌頻接而俱手把
黃卷自學周孔之教於南淵先生所遂於
路上往還之間並肩潛圖無不相協於是中
臣鎌子建議曰謀大事者不如輔請
納我山倉田麻呂長女為妃而成婚姻
之昵然後陳說欲與計事成功之路莫近
於茲中大兄聞而大悅曲從所議中臣鎌

子連即自往謀要訖而長女所期之夜被
偷於族族謂躬也由是倉山田臣憂惶所臥
不知所為少女在父憂惶就而問曰憂何

大陸の文化を伝えた留学生

(中大兄皇子と中臣鎌足は) ともに
書物を携え、南淵(請安)先生のところ
で周・孔の教え①を学んだ。

〔注釈〕

①周・孔とは、周公と孔子。周・孔の教えとは、
漢代以降、中国の国教となった儒教を指す。

『日本書紀』卷二四 皇極天皇三年

隋に派遣された最初の留学生たち

「この時、唐国に遣わされし学生は、倭漢直福因（やまとのあやのあたふくいん）奈羅訳語恵明（ならのおさえみよう）

高向漢人玄理（たかむくのあやひとくろまる）

新漢人大国（いまきのあやひとおおくに）

学問僧は、

新漢人日文（いまきのあやひとにちもん）

南淵漢人請安（みなみぶちのあやひとしょうあん）

志賀漢人恵隱（しがのあやひとえいん）

漢人広濟（あやひとこうさい）

など并せて八人なり。

紫繡織及五色（日本書紀卷二）推古天皇十六年
於朝九月辛未朔乙亥饗客等於難波大郡宰
已唐客裴世清罷歸則復以小野妹乎臣爲大

日本書紀卷二

十四

使吉士雄成爲小使福利爲通事副于唐客而
遣之爰天皇聘唐帝其辭曰東天皇敬白西皇
帝使人鴻臚寺掌客裴世清等至久憶方解季
秋薄冷尊何如想清念此即如常今遣大禮蘓
因高（大禮乎那利等往謹白不具是時遣於唐）
國學生倭漢直福因奈羅譯語恵明高向漢人
玄理新漢人入國學問僧新漢人日文南淵漢
人請安志賀漢人恵隱漢人廣濟等并八人也

國傳

事云々以沙門是法師高向史玄理為國博

士幸矣以金策賜阿倍倉梯麻呂大臣与藤我

山田石川麻呂大臣賜金云云卯天皇祖母

尊皇太子於大槻樹之下召集群臣盟曰吉天

祇曰天覆地載帝道唯一而末代流薄君臣失

序皇天假神於我誅殄暴逆今共憑心而自今

以後君無二政臣無貳朝君戴此盟改天豐財

天灾地妖鬼誅人伐賊如日月也

重日足姬天皇四年為大化元年

大化元年秋七月丁卯朔戊辰立息長足日廣

額天皇女間人皇女為皇后立二妃阿倍倉梯

麻呂大臣女曰小足媛生有間皇子次妃藤我

山田石川麻呂大臣女曰乳娘丙子高麗百濟

新羅並遣使進調百濟調進兼領任那使任那

大陸の文化を伝えた留学生

(皇極天皇の四年) 沙門是、法師高

向史玄理(たかむくのあやひとくろまる)

を国の博士とした。

『日本書紀』卷二四 皇極天皇四年

隋に派遣された最初の留学生たち

「この時、唐国に遣わされし学生は、倭漢直福因（やまとのあやのあた いふくいん）奈羅訳語恵明（ならのおさえみよう）

高向漢人玄理（たかむくのあやひとくろまる）

新漢人大国（いまきのあやひとおおくに）

学問僧は、

新漢人日文（いまきのあやひとにちもん）

南淵漢人請安（みなみぶちのあやひとしょうあん）

志賀漢人恵隱（しがのあやひとえいん）

漢人広濟（あやひとこうさい）

など并せて八人なり。

紫繡織及五色（日本書紀卷二）推古天皇十六年
於朝九月辛未朔乙亥饗客等於難波大郡宰
已唐客裴世清罷歸則復以小野妹子臣爲大

日本書紀卷二

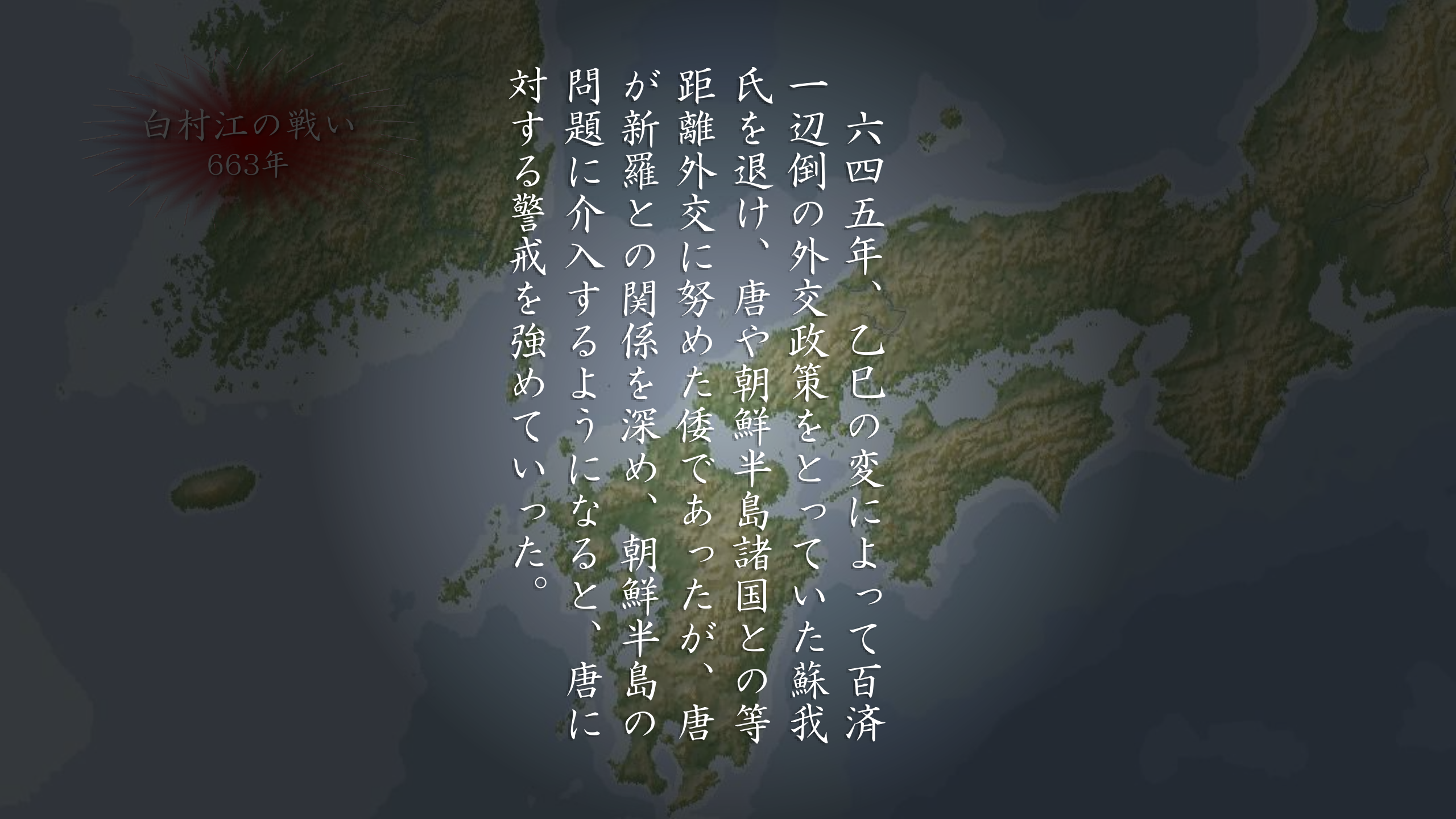
十四

使吉士雄成爲小使福利爲通事副于唐客而
遣之爰天皇聘唐帝其辭曰東天皇敬白西皇
帝使人鴻臚寺掌客裴世清等至久憶方解季
秋薄冷尊何如想清念此即如常今遣大禮蘓
因高大禮乎那利等往謹白不具是時遣於唐
國學生倭漢直福因奈羅譯語恵明高向漢人
玄理新漢人大唐學問僧新漢人日文南淵漢
人請安志賀漢人恵隱漢人廣濟等并八人也

西暦	中国	日本	遣使
600年	隋文帝開皇20年	推古 8年	第一回遣隋使
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使
608年	4年	16年	第三回遣隋使(最初の留学生を派遣)
614年	10年	22年	第四回遣隋使
618年	隋が滅亡し、唐が建国		
623年	唐高祖武徳 6年	31年	第一期留学生の倭漢直福因が帰国
630年	唐太宗貞観 4年	舒明 2年	第一回遣唐使
640年	14年	12年	第一期留学生の南淵漢人請安、高向漢人玄理が帰国
644年	18年	皇極 3年	中大兄皇子と中臣鎌足、南淵漢人請安から儒教を学ぶ
645年	19年	大化元年	大化の改新によって誕生した中大兄皇子らの新政権は、第一期留学生の新漢人日文（僧旻）と高向漢人玄理を国博士に迎え、唐の制度に倣って新たな国づくりを始める



第三節 白村江の戦いと遣唐使



白村江の戦い

663年

六四五年、乙巳の変によって百済
一辺倒の外交政策をとっていた蘇我
氏を退け、唐や朝鮮半島諸国との等
距離外交に努めた倭であったが、唐
が新羅との関係を深め、朝鮮半島の
問題に介入するようになる、唐に
対する警戒を強めていった。

西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観 4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽 4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶 4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳 2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封 2年	6年	途中帰国	
669年	総章 2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安 2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元 5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝 5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元 2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			

遣唐使とともに唐に渡った蝦夷

〔解説〕

朝鮮半島で緊張が高まる中、倭は
第四回遣唐使を派遣した。

この前年、倭は日本列島内の安定
を図るため、東北地方に水軍を派遣
し、先住民の蝦夷（えみし）らの討伐を
行った。

この討伐の成果を示すため、遣唐
使は帰順した蝦夷の男女二名を同行
させ、洛陽で高宗に謁見させた。

一人津輕郡蝦蟇（えびな）一百十二人其虜四人瞻振
鉏蝦夷二十人於一所而大饗賜祿（えき）瞻振鉏此
陸即以船一隻與五色絲帛祭彼地神至肉入

籠時問菟蝦夷瞻鹿嶋菟總名二人進曰可以

後方羊蹄爲政所焉

肉入籠此云之梨姑問
菟此云塗毗宇菟總名此

云字保那後方羊蹄此云斯
梨蔽之政所蓋蝦夷郡乎

隨瞻鹿嶋等語遂

置郡領而歸授道與越國司位各二階郡領

與主政各一階

或本云阿倍引田臣比羅夫
與肅慎戰而歸獻虜味九人秋

七月朔丙子朔戊寅遣小錦下坂合部連石布

大仙下津守連吉祥使於唐國仍以陸道與蝦

夷男女二人示唐天子

伊吉連傳總書曰同大
皇之世小錦下坂合部

遣唐使とともに唐に渡った蝦夷

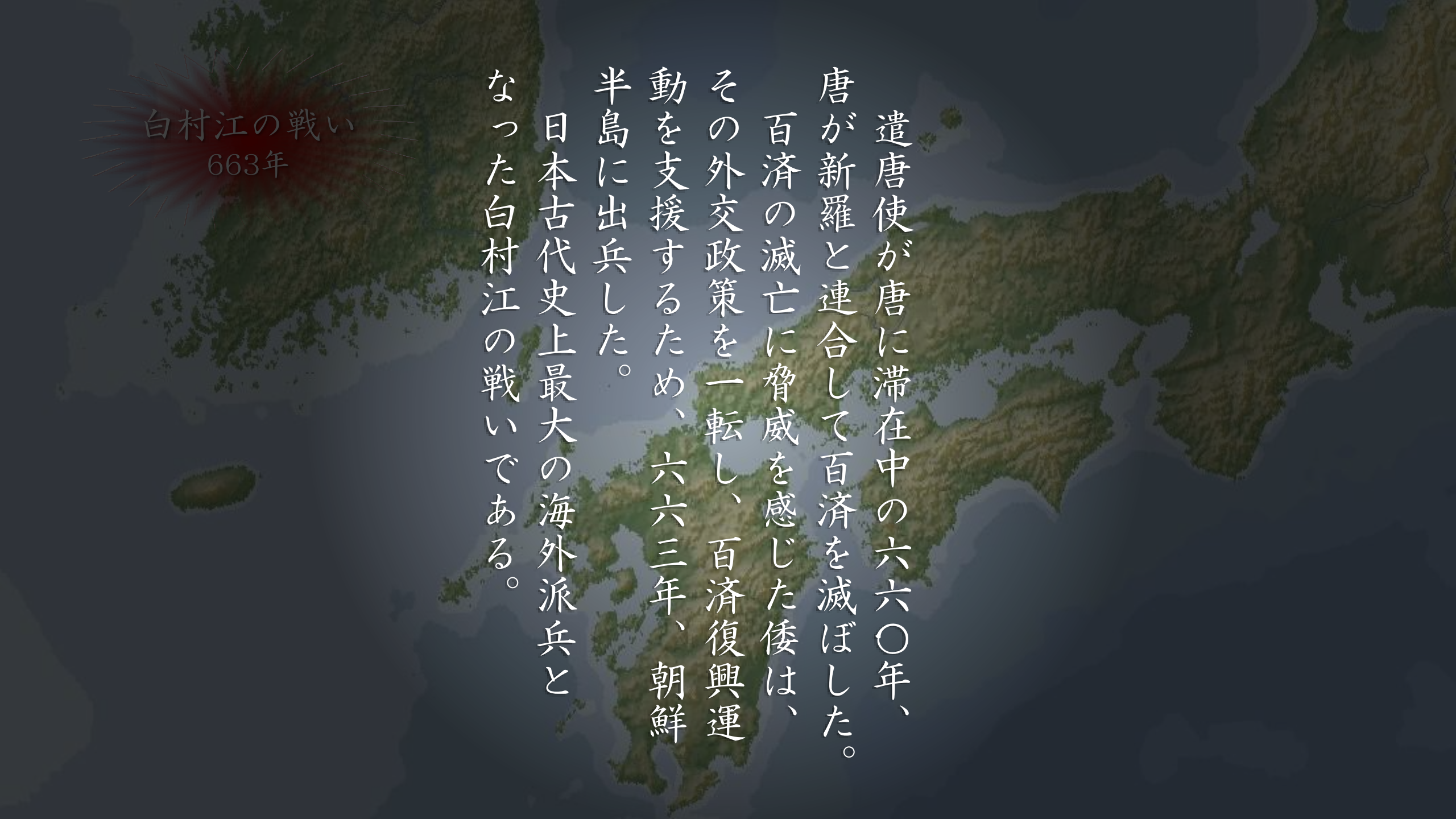
〔解説〕

このときの遣唐使については、渡来系氏族出身の伊吉博徳（いきのはかとこの書いた報告書が『日本書紀』に収められており、当時のようすを伝える貴重な史料となっている。

報告書には、唐の高宗が蝦夷に謁見したときのようなようすも記されている。

連舩横道逆風漂到唐海之嶋々名聞加委仍爲嶋人所滅使東漢長直阿利麻坂合部連惜積等五人盜垂嶋人之舩逃到括別々懸官人送到洛陽之京十六日夜半之時吉祥連舩行到越引會稽縣瀕岸山東北風々太急二十二日行到餘姚縣所乘大舩及諸調度之物留著彼處潤十月一日行到越州之底十月十五日乘驛入京二十九日馳到東京天子在東京三十日天子相見問說之日本國天皇平安以不使人謹答天地合德自得平安天子問曰執事卿等好在以不使人謹答天皇憐重亦得好在

天子問曰國內平不使人謹答治講天地萬民無事天子問曰此等蝦夷國有何方使人謹答國有東北天子問曰蝦夷幾種使人謹答類有三種遠者名都加留少者名麋蝦夷近者名熟蝦夷今此熟蝦夷每歲入貢本國之朝天子問曰其國有五穀使人謹答無之食肉存活天子問曰國有屋舍使人謹答無之深山之中止住樹木天子重曰朕見蝦夷身面之異極理喜恠使人遠來辛苦退在館裏後更相見十一月一日朝有冬至之會々日亦覲所朝諸蕃之中倭客蝦勝後由出火之亂棄而不復檢十二月三日韓智興倫人西漢木麻呂枉護我客々等獲罪唐朝已決流罪前流智興於三千里之外客中有伊吉連博徳奏因即免罪事了後勅青國家來年必有海東之政汝等倭客不得來歸遂還西京幽置別處聞戶防禁不許東西困苦經年



白村江の戦い

663年

遣唐使が唐に滞在中の六六〇年、唐が新羅と連合して百済を滅ぼした。百済の滅亡に脅威を感じた倭は、その外交政策を一転し、百済復興運動を支援するため、六六三年、朝鮮半島に出兵した。

日本古代史上最大の海外派兵となった白村江の戦いである。

西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観 4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽 4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶 4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳 2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封 2年	6年	途中帰国	
669年	総章 2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安 2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元 5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝 5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元 2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			





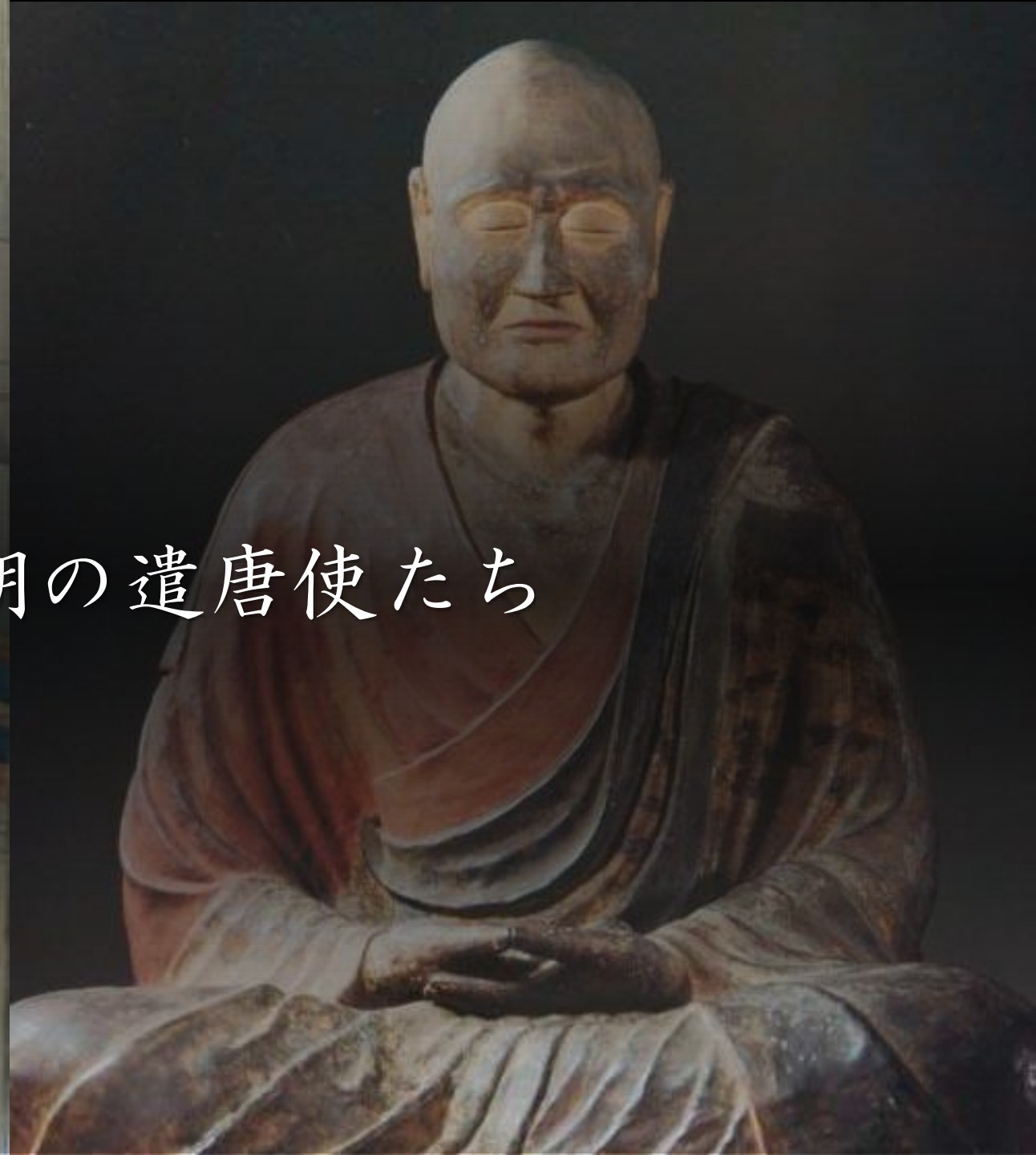
NHK E

NHK ETV特集「日本と朝鮮の2000年 第4回 そして日本が生まれた」

西暦	中国	日本	使節	備考
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観 4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽 4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶 4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳 2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封 2年	6年	途中帰国	
669年	総章 2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安 2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元 5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝 5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元 2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			



第四節 最盛期の遣唐使たち



白村江の戦い
663年

白村江の戦いで大敗を喫した倭は、
唐や新羅の攻撃に備えて大宰府周辺
に水城や山城を構築し、防人を配置
して有事に備えた。



大野城跡：水城構築の翌年(665)、百濟亡命貴族の指揮下で造られた朝鮮式山城

水城跡：白村江の戦いの翌年(天智3年(664))に大宰府防衛のために構築された土塁。全長約1.2km、幅80m、高さ13m、博多側には幅60mの濠があった。

倭の制度改革

〔解説〕

一方、白村江の戦いを通じて唐との国力の差を痛感した倭は、唐の先進的な制度に倣い、ふたたび国内の制度改革を進めた。



白村江の戦いの後、日本が唐の制度に倣って最初に行った改革は？

①防衛力拡大のための軍隊の整備

②人材育成のための教育の整備



唐

倭から日本へ（日本側の記録）

〔解説〕

白村江の戦いを通じて唐との国力の差を痛感した倭は、唐の先進的な教育制度に倣って人材育成に努め、そこで育成した人材によって法律を定め（大宝律令）、国史の編纂を開始した（日本書紀）。

唐

新羅

倭

国子監(教育制度)

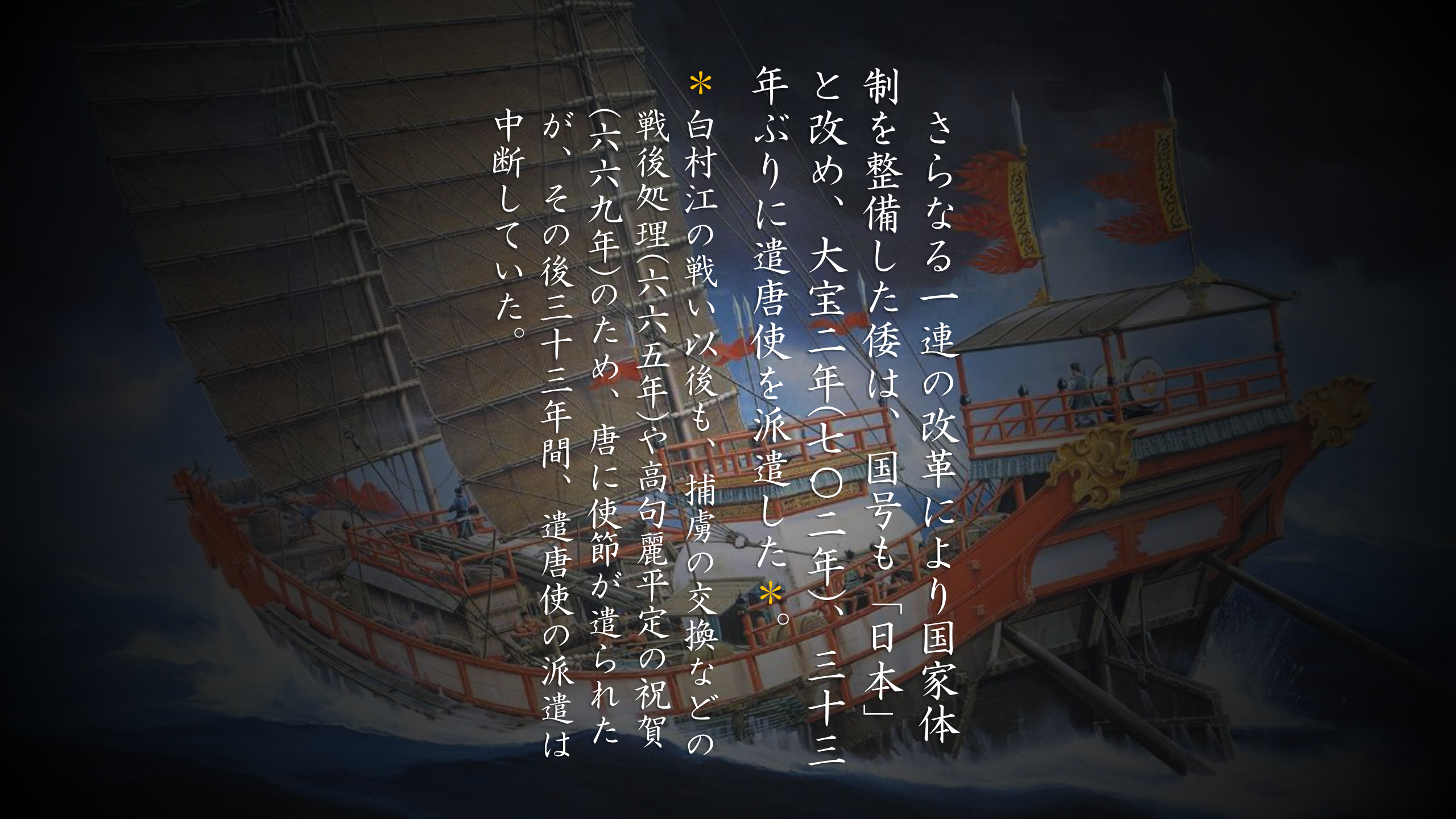
律令(法律制度)

正史(国史編纂)

大学寮(671?~701)

大宝律令(681~701)

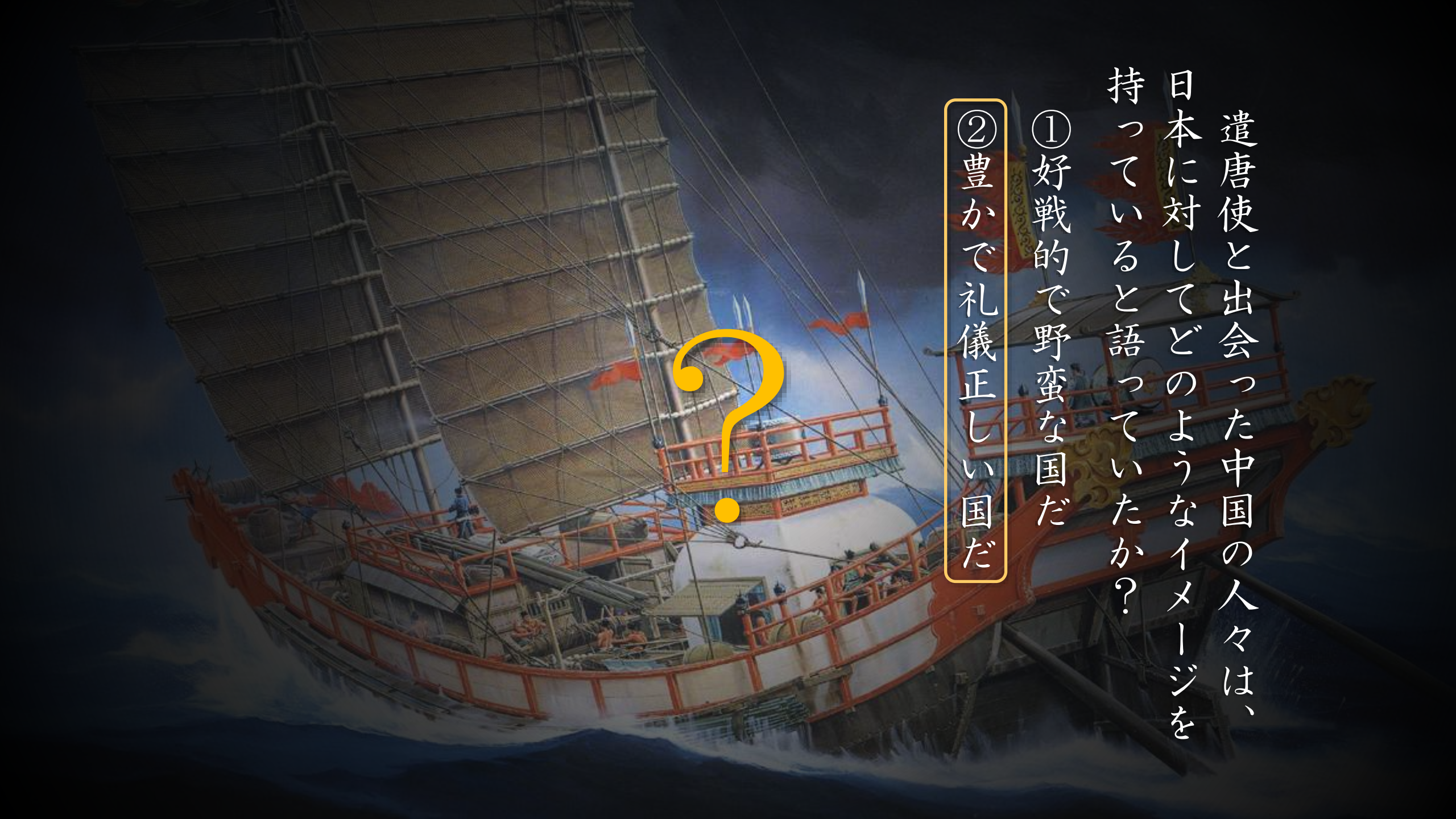
日本書紀(681~710)



さらなる一連の改革により国家体制を整備した倭は、国号も「日本」と改め、大宝二年（七〇二年）、三十三年ぶりに遣唐使を派遣した*。

* 白村江の戦い以後も、捕虜の交換などの戦後処理（六六五年）や高句麗平定の祝賀（六六九年）のため、唐に使節が遣られたが、その後三十三年間、遣唐使の派遣は中断していた。

西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観 4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽 4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶 4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳 2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封 2年	6年	途中帰国	
669年	総章 2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安 2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元 5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝 5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元 2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			



遣唐使と出会った中国の人々は、
日本に対してどのようなイメージを
持っていると言っていたか？

① 好戦的で野蛮な国だ

② 豊かで礼儀正しい国だ

之年限考第一准所任之例○己丑河内國古
市郡人高屋連藥女一產三男賜絶二足綿二
屯布四端○己巳阿波國獻木連理○丙子奉
幣祈雨于諸社○秋七月甲申朔正四位下粟
田朝臣真人自唐國至初至唐時有入來問曰
何處使人答曰日本國使我使反問曰此是何
州界答曰是大周楚州鹽城縣界也更問先是
大周今稱大周國号緣何改稱答曰永淳二年

天皇太帝崩皇太后登位稱号聖神皇帝國号
大周問答略了唐人謂我使曰亟聞海東有
倭國謂之君子國人民豐樂禮義敦行今看使
人儀容大淨豈不信乎語畢而去○丙戌左京
職獻白鷺下総國獻白鳥○壬辰以時雨不降
遣使祈雨於諸社○庚子公廨祿給式部省太

唐の人々の対日イメージ(日本側記録)

〔解説〕

白村江の戦いから四十年近くが過

ぎた大宝二(七〇二)年、粟田朝臣真人

(あわたのあそんまひと)を長官として第七回

遣唐使が派遣された。

それから二年後、帰国した粟田真

人は唐に到着した時のようすを次の

ように報告している。

之年限考第一准所任之例○
市郡人高屋連藥女一産三男賜絶二足綿二
屯布四端○己巳阿波國獻木連理○丙子奉
幣祈雨于諸社○秋七月甲申朔正四位下粟
田朝臣真人自唐國至初至唐時有入來問曰
何處使人答曰日本國使我使反問曰此是何
州界答曰是太周楚州鹽城縣界也更問先是
太唐今稱太周國号緣何改稱答曰永淳二年

天皇太帝崩皇太后登位稱号聖神皇帝國号
太周問答略了唐人謂我使曰亟聞海東有
倭國謂之君子國人民豐樂禮義敦行今看使
人儀容大淨豈不信乎語畢而去○丙戌左京
職獻白鷺下総國獻白鳥○壬辰以時雨不降
遣使祈雨於諸社○庚子公廨祿給式部省太

唐の人々の対日イメージ(日本側記録)

唐に着いたばかりのころ、ある人
が尋ねた。

「どこの国の使節の方ですか」

「日本国の使節です」

我々の使節が

「ここは何というところですか」

と尋ね返すと

「周の楚州塩城縣です」と答えた。

後漢 25-220

魏 220-265 蜀 221-263 吳 222-280

晋 265-316

五胡十六国時代

東晋 317-420

北朝 439-589

南朝 420-589

隋 581-619

唐 618-907

五代十国 907-960

遼

北宋 960-1127

金 1115-1234

南宋 1127-1279

元 1271-1368

明 1368-1644

清 1616-1912

中華民國 1912-1949

中華人民共和國 1949-



倭が第七回遣唐使を派遣する(702年)

之年限考第一准所任之例○己巳河内國古
市郡人高屋連藥女一產三男賜絶二足綿二
屯布四端○己巳阿波國獻木連理○丙子奉
幣祈雨于諸社○秋七月甲申朔正四位下粟
田朝臣真人自唐國至初至唐時有入來問曰
何處使人答曰日本國使我使反問曰此是何
州界答曰是大周楚州鹽城縣界也更問先是
大周今稱大周國号緣何改稱答曰永淳二年

天皇太帝崩皇太后登位稱号聖神皇帝國号
大周問答略了唐人謂我使曰亟聞海東有六
倭國謂之君子國人民豐樂禮義敦行今看使
人儀容大淨豈不信乎語畢而去○丙戌左京
職獻白鷺下総國獻白鳥○壬辰以時雨不降
遣使祈雨於諸社○庚子公廨祿給式部省太

唐の人々の対日イメージ(日本側記録)

「以前は唐と称していたのに、なぜ
周と国名を変えたのですか」

と尋ねると、

「永淳二年（六八三年）に高宗が崩
御されると、則天武后が即位して聖
神皇帝と称され、国名を周と改めた
のです」
と答えた。

之年限考第一准所任之例○
市郡人高屋連藥女一産三男賜絶二足綿二
屯布四端○己巳阿波國獻木連理○丙子奉
幣祈雨于諸社○秋七月甲申朔正四位下粟
田朝臣真人自唐國至初至唐時有入來問曰
何處使人答曰日本國使我使反問曰此是何
州界答曰是大周楚州鹽城縣界也更問先是
太唐今稱大周國号緣何改稱答曰永淳二年

天皇太帝崩皇太后登位稱号聖神皇帝國号
大周問答略了唐人謂我使曰亟聞海東有六
倭國謂之君子國人民豐樂禮義敦行今看使
人儀容大淨豈不信乎語畢而去○丙戌左京
職獻白鷺下総國獻白鳥○壬辰以時雨不降
遣使祈雨於諸社○庚子公廨祿給式部省太

唐の人々の対日イメージ(日本側記録)

問答がほぼ終わると、唐の人は
我々の使節にこういった。

「海の東にある倭という国は君子の
国で、人々は豊かで礼義正しいとよ
く聞いていました。いま使節の方々
の立派な様子を見て、それが本当だ
とわかりました」

そう言い終わると去って行つた。

栗田真人が報告した当時の中国の
人々の対日イメージは真実か？

① 真実

② だいぶ盛ってる



唐の人々の対日イメージ(中国側記録)

長安三年(七〇三年)、日本国の大
臣・朝臣真人(栗田真人)が朝貢に来た。

朝臣真人というのは、中国の戸部
尚書のような官職で、進徳冠をかぶ
り、その頂を花模様にし、四方に分
けていた。紫の袍を身につけ、絹を
腰帯にしていた。

八寸左右各數枚以明書『旧唐書』卷一四九東夷伝日本國
使獻方物太宗矜其道遠勅所司無令歲貢又遣新州刺史高表仁
持節往撫之表仁無綬遠之才與王子爭禮不宣朝命而還至二十
二年又附新羅奉表以通起居

日本國者倭國之別種也以其國在日邊故以日本爲名或曰倭國
自惡其名不雅改爲日本或云日本舊小國併倭國之地其人入朝
者多自矜大不以實對故中國疑焉又云其國界東西南北各數千
里西界南界咸至大海東界北界有大山爲限山外即毛人之國長
安三年其大臣朝臣真人來貢方物朝臣真人者猶中國戶部尚書
冠進徳冠其項爲花分而四散身服紫袍以帛爲腰帶真人好讀經
史解屬文容止溫雅則天宴之於麟徳殿授司膳卿放還下國開元
初又遣使來朝因請儒士授經詔四門助教趙玄默就鴻臚寺教之
乃遣玄默闊幅布以爲束修之禮題云白龜元年調布人亦疑其僞
此題所得錫賚盡市文籍泛海而還其偏使朝臣仲滿慕中國之風

唐書列傳卷一百四十九上

因留不去改姓名爲朝衡仕歷左補闕儀王友衡留京師五十年好
書籍放歸鄉逗留不去天寶十二年又遣使貢上元中擢衡爲左散
騎常侍鎮南都護貞元二十年遣使來朝留學生摘免勢學問僧空
海元和元年日本國使判官高階真人上言前件學生藝業稍成願
歸本國便請與臣同歸從之開成四年又遣使朝貢

唐の人々の対日イメージ(中国側記録)

真人は経史を読むのを好み、文章を書くことができ、容貌や身のこなしも優雅であつた。

則天武后は麟德殿で宴を開き、司膳卿の位を授けて、本国に帰還させた。

『旧唐書』卷一四九東夷伝日本國

八寸左右各數枚以明貴賤等綾衣服之制朝類新羅貞觀五年遣使獻方物太宗矜其道遠勅所司無令歲貢又遣新州刺史高表仁持節往撫之表仁無綏遠之才與王子爭禮不宣朝命而還至二十二年又附新羅奉表以通起居

日本國者倭國之別種也以其國在日邊故以日本爲名或曰倭國自惡其名不雅改爲日本或云日本舊小國併倭國之地其人入朝者多自矜大不以實對故中國疑焉又云其國界東西南北各數千里西界南界咸至大海東界北界有大山爲限山外即毛人之國長安三年其大臣朝臣真人來貢方物朝臣真人者猶中國戶部尚書冠進德冠其項爲花分而四散身服紫袍以帛爲腰帶真人好讀經史解屬文容止溫雅則天宴之於麟德殿授司膳卿放還下國開元初又遣使來朝因請儒士授經詔四門助教趙玄默就鴻臚寺教之乃遣玄默闊幅布以爲束修之禮題云白龜元年調布人亦疑其僞此題所得錫賚盡市文籍泛海而還其偏使朝臣仲滿慕中國之風

唐書列傳卷一百四十九上

四六

因留不去改姓名爲朝衡仕歷左補闕儀王友衡留京師五十年好書籍放歸鄉逗留不去天寶十二年又遣使貢上元中擢衡爲左散騎常侍鎮南都護貞元二十年遣使來朝留學生摘免勢學問僧空海元和元年日本國使判官高階真人上言前件學生藝業稍成願歸本國便請與臣同歸從之開成四年又遣使朝貢

唐書列傳卷一百四十九上

遣唐使として派遣された留学生の中には、学業優秀で唐の役人に取り立てられる者もいた。

七十七年、第八回遣唐使の一員として唐に留学したある留学生は、科挙(官吏登用試験)に合格し、唐の官僚となつて玄宗皇帝に重用されている。

それは誰か？

①阿倍仲麻呂

②菅原道真



阿倍仲麻呂（六九八〜七七〇）

〔解説〕

七一六年、十九歳で遣唐留学生に選ばれ、翌年、第八回遣唐使に従つて唐に渡る。

唐の太学に学び、科挙に合格して唐の官吏となった。

中国名を朝衡（晁衡）と名乗り、王維や李白らとも親交があつた。

七五二年、第十回遣唐使とともに帰国を図るが、船がベトナムに漂着。帰国を果たせぬまま、七十三歳で長安に没した。



西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観 4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽 4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶 4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳 2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封 2年	6年	途中帰国	
669年	総章 2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安 2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元 5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝 5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元 2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			

遣唐使・井真成の墓誌蓋と墓誌石

〔解説〕

遣唐使の中には、現地で亡くなる人もいた。

唐がそうした人々を手厚く葬って、いたことがわかる遺物が、二〇〇四年、唐の都であった西安で発見された。阿倍仲麻呂とともに第八回遣唐使の一員として唐に渡り、現地で亡くなった井真成という人物の墓誌石である。

遣唐使・井真成の墓誌蓋と墓誌石 (39.5cm×39.5cm)





井真成墓誌発見（NHK 新シルクロード 第10集 「西安 永遠の都」 より）

贈尚友
肅穆
府君
墓誌
銘

井真成墓誌蓋拓本

贈 府 志
尚 御 君
衣 井 墓
銘

贈 府 志
尚 御 君
衣 井 墓
銘

井真成墓誌蓋拓本

井真成墓誌拓本

拓本はどのようにして作るか？

① 石碑に紙を貼り、上から墨をつける

② 石碑に墨を塗り、その上に紙を貼って写す

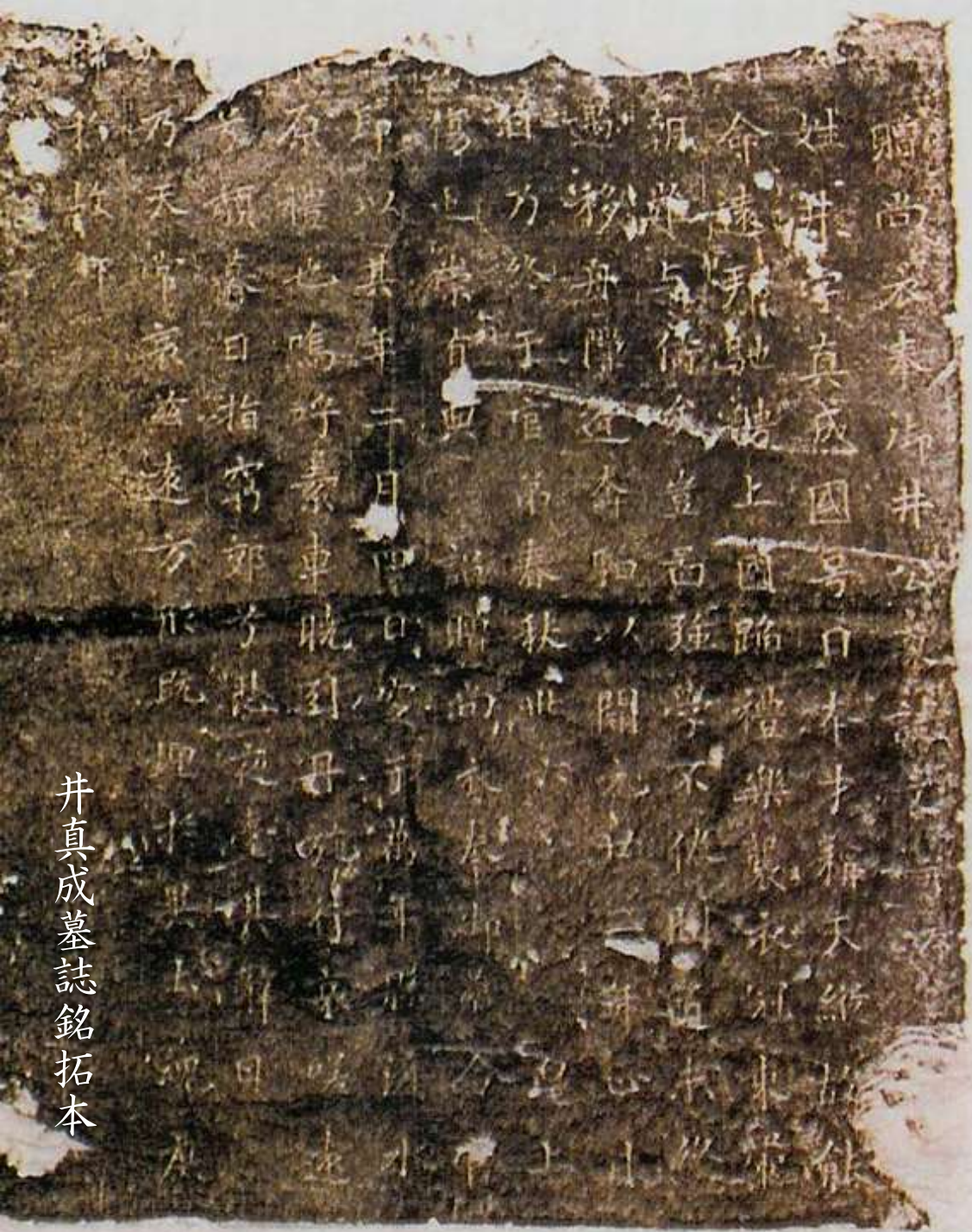




遣唐使・井真成の墓誌銘

贈尚衣奉御井公墓誌文並序
公姓井字真成國号日本才稱天縱故能
銜命遠邦馳騁上國蹈禮樂襲衣冠束帶
升朝難與儔矣豈圖強學不倦聞道未終
壑遇移舟隙逢奔駟以開元廿二年正月
十日乃終於官弟春秋卅六 皇上
悼傷追崇有典 詔贈尚衣奉御葬令官
給卽以其年二月四日窆於萬年縣瀍水
東原禮也嗚呼素車曉引丹旆行衰嗟遠
路兮頽暮日指窮郊兮悲夜臺其辭曰
憾乃天常哀茲遠方形既埋於異土魂庶
歸於故鄉

井真成墓誌銘（灰色字は氣賀澤保規博士の推定）



井真成墓誌銘拓本

遣唐使・井真成の墓誌銘

公、姓は井、字は真成。国号は日本。卓越した才能により遠国から命を受け、我が国に来た。礼をわきま
え、身なりも正しく、朝廷に昇れば
並ぶ者もないほどだった。

開元二二年（七三四年）正月十日、
官舎で三六年の生涯を閉じた。玄宗
皇帝陛下はその死を悼まれ、尚衣奉
御の官位を追贈して葬儀を行わせ、
同年二月四日に万年県漚水の東原に
埋葬した。



井真成墓誌銘拓本

西暦	中国	日本	遣使	時代区分
600年	隋文帝開皇20年	推古8年	第一回遣隋使	遣隋使 (日中交流の草創期)
607年	隋煬帝大業 3年	15年	第二回遣隋使	
608年	4年	16年	第三回遣隋使	
614年	10年	22年	第四回遣隋使	
618年	隋が滅亡し、唐が建国			
630年	唐太宗貞観 4年	舒明2年	第一回遣唐使	遣唐使 (第一期 遣隋使の延長)
653年	唐高宗永徽 4年	白雉4年	第二回遣唐使	
654年	5年	5年	第三回遣唐使	
659年	顕慶 4年	斉明5年	第四回遣唐使	
663年	白村江の戦い			
665年	麟徳 2年	天智4年	第五回遣唐使	遣唐使 (第二期 戦後処理の外交交渉)
667年	乾封 2年	6年	途中帰国	
669年	総章 2年	8年	第六回遣唐使	
	30年以上にわたり遣唐使の派遣を中断			
702年	武則天長安 2年	大宝2年	第七回遣唐使	遣唐使 (第三期 最盛期)
717年	唐玄宗開元 5年	養老元年	第八回遣唐使	
733年	21年	天平5年	第九回遣唐使	
746年	天宝 5年	18年	中止	
752年	11年	天平勝宝4年	第十回遣唐使	
759年	唐肅宗乾元 2年	天平宝字3年	第十一回遣唐使	
762年	唐代宗宝応元年	6年	中止(二回)	
777年	大暦12年	宝亀8年	第十二回遣唐使	遣唐使 (第四期 衰退期)
780年	唐徳宗建中元年	11年	第十三回遣唐使	
804年	貞元20年	延暦23年	第十四回遣唐使	
836年	唐文宗開成元年	承和5年	第十五回遣唐使	
894年	唐昭宗乾寧元年	寛平6年	中止	
907年	唐が滅亡			

唐の玄宗皇帝から贈られた国号

〔解説〕

遣唐使や留学生たちの礼儀正しく優秀なふるまいは、唐王朝の日本に対する評価をも高めることになった。

来日した中国の僧・思託が、延暦七年（七八八年）に著した『延暦僧録』には、唐の玄宗皇帝が日本に「有義礼儀君子国」という国号を与えたことが記されている。



旬北方黃金山出海上高廿五由旬此四寶山谷從
金剛地水輪際出以十六万八千由旬地藏菩薩化
北方金山神施金遂陸與國供聖武菩薩金銅盧舍
那佛用仍差少僧都良辨及佐伯宿禰令毛人命造
寺別當又造等身銀像一軀又發使入唐使至長安
不拂塵唐至開元天地大寶聖武應道皇帝云彼國
有賢主君觀其使臣趨揖有異即加号日本為有義
禮儀君子之國復元日拜朝賀正勅命日本使可於
新羅使之上又勅命朝衡領日本使於府庫一切悉
遍宥至彼披三教殿初礼君主教殿御座如常莊飾

東大寺要錄所引延曆僧錄

凡經三史架列積載厨龕次至御披光君之教堂閣
少高顯御座莊嚴少勝厨列龕函盈滿四子太玄後
至御披釋典殿宇顯教嚴麗殊絕龕函皆以雜宝厠
填檀沈異香莊校御座高廣倍勝於前以雜寶而為
燭臺下有巨鼈戴以蓬萊一上列仙宮靈宇戴宝
唐の玄宗皇帝から贈られた国号

李白圖卷

(七五二年)再び唐へ使節(第十回及
遣唐使)を送った。一行は長安に到
着すると、旅の疲れもそのままに宮
中に参内した。

延暦僧錄勝宝感神聖武皇帝菩薩伝

旬北方黃金山出海上高廿五由旬此四寶山谷棧從
金剛地水輪際出以十六万八千由旬地藏菩薩化
北方金山神施金遂陸與國供聖武菩薩金銅盧舍
那佛用仍差少僧都良辨及佐伯宿禰令毛人命造
寺別當又造等身銀像一軀又發使入唐使至長安
不拂塵唐至開元天地大寶聖武應道皇帝云彼國
有賢主君觀其使臣趨揖有異即加号日本為有義
禮儀君子之國復元日拜朝賀正初命日本使可於
新羅使之上又勅命朝衡領日本使於府庫一切款
遍省至彼披三教殿初礼君主教殿御座如常莊飾

東大寺要錄所引延曆僧錄

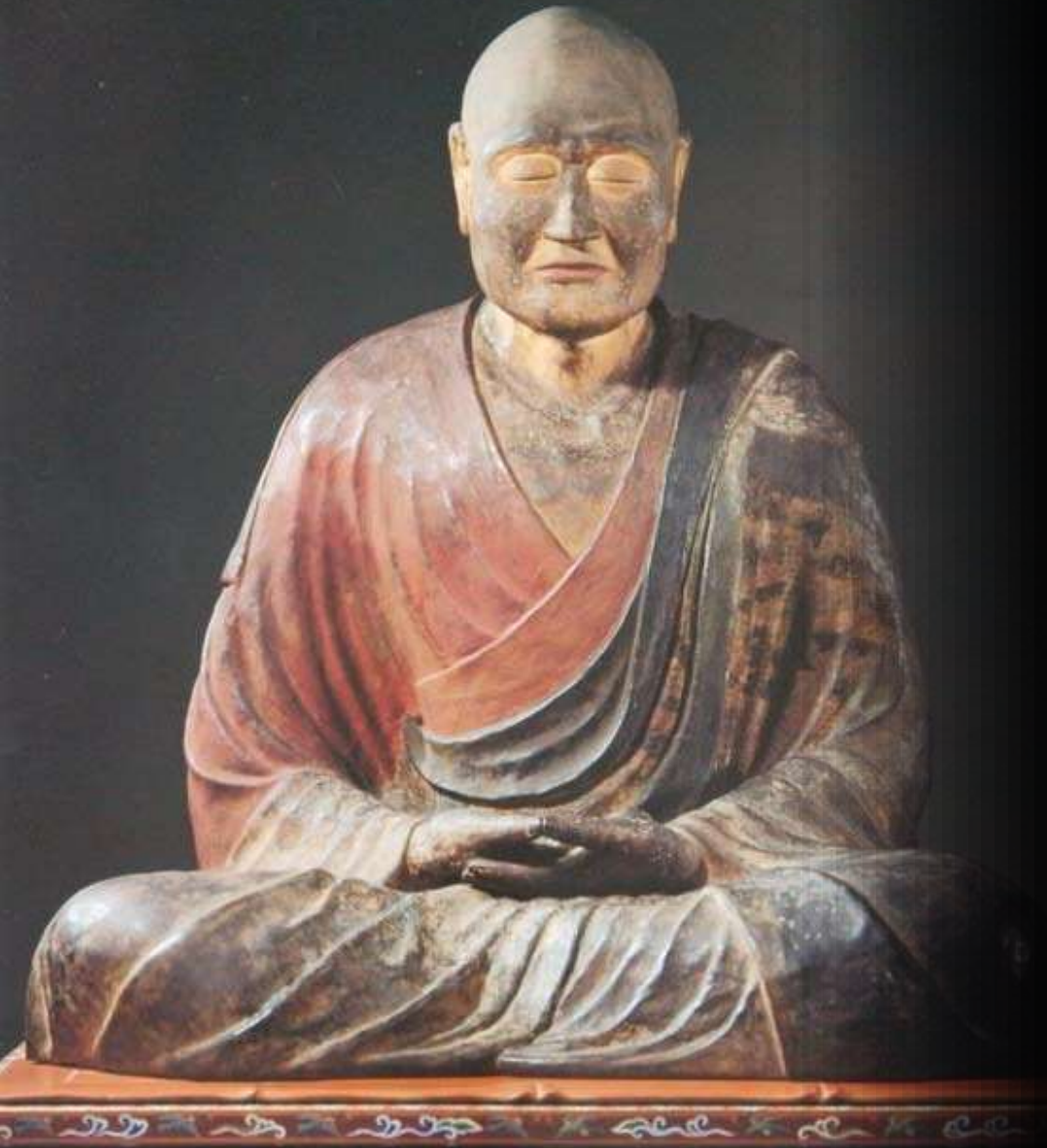
凡經三史架列積載厨龕次至御披卷君之教堂閣
少高顯御座莊嚴少勝厨列龕函盈滿四子太玄後
至御披釋典殿宇顯教嚴麗殊絕龕函皆以雜宝厠
唐の玄宗皇帝から贈られた国号
唐の玄宗皇帝は「かの国に優れた
君主がいることは、その使臣の振る
舞いが並々でないことを見ればわか
る」といい、日本に「有義礼儀君子
国」という国号を与えた。さらに元
日の朝賀の際は、日本の使節の序列
を新羅の上位に据えるよう命じた。

延暦僧錄 勝宝感神聖武皇帝菩薩伝

遣唐使は、唐の優れた人材も日本に招来した。右の像は、第十回遣唐使が招来した唐の高僧である。この高僧とは誰か？

① 玄奘

② 鑑真

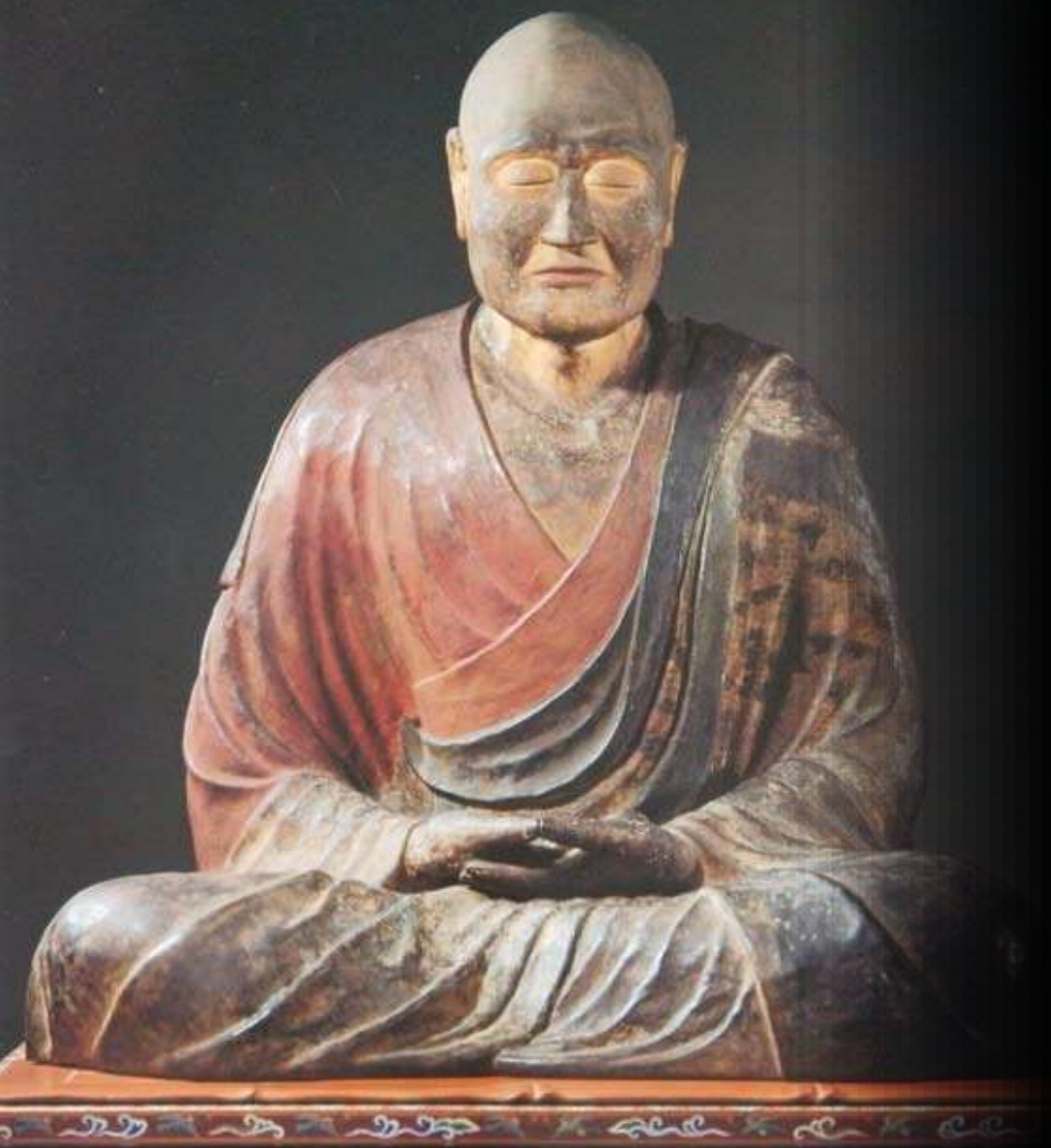


鑑真(六八八〜七六三)

〔解説〕

唐の高僧。揚州江陽県の生れ。

当時、日本では官許を得ぬまま出家する私度僧が増えていた。朝廷は僧尼の受戒制度を整えるために、第九回遣唐使を派遣する際に僧・栄叡(ようえい)を同行させ、揚州大明寺の鑑真に日本への渡航を要請した。



鑑真像(唐招提寺)

鑑真(六八八〜七六三)

〔解説〕

鑑真(かんしん)は日本の要請に応じ、五回に渡って渡航を企てたが、いずれも失敗し、視力を失った。七五二年、六度目の渡航でようやく日本に渡った鑑真は、僧尼の受戒制度を整備するとともに、唐招提寺を建てて日本の律宗の開祖となった。

鑑真の墓(唐招提寺)

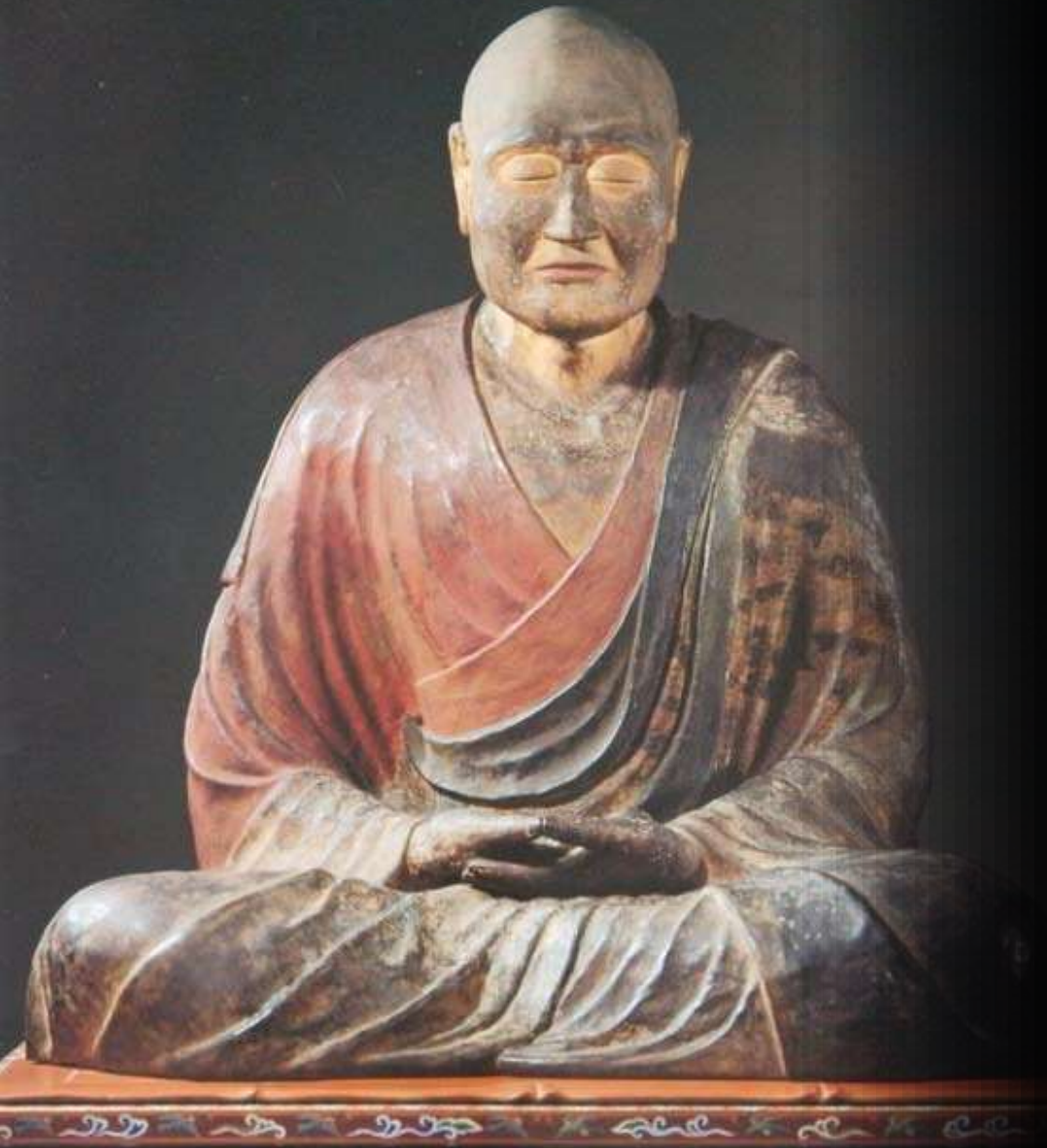


「鑑真和上と戒律のあゆみ」（日経イベント&セミナーより）

遣唐使には、使節や留学生ばかりでなく、唐の先進的な技術を学ぶ技術者も含まれていた。左の鑑真像も当時の最新技術で作られたものである。材料には何が使われているか？

① 樹脂

② 木材



鑑真像(唐招提寺)



鑑真像(唐招提寺)

鑑真が来日した当時、日本では東大寺大仏建立による銅不足が生じていた。このため鑑真像や興福寺の阿修羅像など当時制作された仏像の多くは、唐から伝えられた「乾漆造」という技法で作られている。



阿修羅像(興福寺)

まとめ

西暦六〇〇年から八三六年にかけて、日本と中国は遣使の時代を迎える。遣隋使は四回、遣唐使は十五回派遣された。

その間に日本は古代史上最大の危機を迎える。唐が東アジアに新たな国際秩序を築くため、朝鮮半島の新羅とともに百済を滅ぼすと、日本はそれまでの平和外交を捨て、六六三年、朝鮮半島に出兵した。日本の古代史上最大の海外派兵となった白村江の戦いである。

白村江の戦いに敗北した日本は、唐の先進的な教育制度に倣い、人材育成に努め、大宝律令の制定や大学寮の設置、日本書紀の編纂など一連の改革を進めると、国号も「日本」と改め、三十三年ぶりに遣唐使を派遣した。すると、遣使や留学生たちの礼儀正しい態度とも相俟って、唐王朝からは「君子の国」と称えられるようになった。

参考文献

- ・東野治之『遣唐使』（岩波新書二〇〇七年）
- ・上田雄『遣唐使全航海』（草思社二〇〇六年）
- ・専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本』（朝日選書二〇〇五年）
- ・王勇『唐から見た遣唐使』（講談社新書メチエ一九九八年）

映像資料

- ・ETV特集「日本と朝鮮半島二〇〇〇年第四集そして日本が生まれた」（NHK教育二〇〇九年七月二六日放送）